

〔世事百談〕梅に鶯

梅に鶯をよめること、和歌には常のことなり、鶯宿梅の故事、拾遺和歌集に見えたるより、猶さらなべて世人も鶯どいへば、梅はからずあるべきものとしもおもへり、いとふるぐも、萬葉集にも、鶯には多く梅をよみ合せたり、詩にも葛野王の春日観鶯五言に、素梅開素鷗、嬌鶯弄嬌聲といふ句あり、唐土にはいはぬこと、のみおもへるに、王維の早春行の詩に、紫梅發初遍、黃鳥歌猶澀といへるとぞ鶯梅を對する據ともすべし。

〔書言字考節用集六生植〕未開紅一名

〔佐渡志四古蹟〕未開紅

コノ梅雜太郡竹田村大運寺ニアリ、苔ハ薄紅ニテ開ケテ後ハ尋常ノ梅ナリ、天正ノ頃高阪彈正

ガ姪、春日總次郎トイフモノ、此國ニ遁レ來テ、大運寺ノ羅漢堂ニ寓居シテ、此所ニテナクナリケルガ、鉢植ヲ携來テコ、ニ植シトイフナリ、總次郎ハ瘤疊ヲ煩ヒテ世ヲ早クセントイヘリ、

〔書言字考節用集六生植〕豐後梅○支那所謂鵝梅是矣○消梅本朝俗如此者居多蓋斥州縣別大小所以○凡

暗令也○模同燕梅○西京雜記

〔和漢三才圖會五果八十六〕梅○中

消梅、實圓鬆脆、多液無滓、惟可生啖、不入煎造○中杏梅○今云豐花色淡紅、實扁而斑、味全似杏○中

豐後梅○大花白帶淡紅色八重、其子最

○此所謂杏梅鵝頂梅之類乎

〔書言字考節用集六生植〕寒梅○又云

○早梅

○大雪梅

〔古今要覽稿草木〕はやさき怡顏齋寒梅抄○中怡顏齋が梅品に早今はやさき寒梅と呼なし、大雪梅と稱せり○中怡顏齋が梅品に早梅とすれ共、是は西土の梅譜に本づきての説也、皇國にて早梅と稱するは、八朔梅、冬至梅、寒梅の